2003年度 COE在外研究報告

映像の比較社会学の構想と実践（その②）

石田 佐恵子*

Saeko ISHITA

Theory and Practice of Comparative Visual Sociology (2)

Ⅰ. 2003年度在外研究　および2004年度継続研究の概要

石田佐恵子は、2002年度の在外研究（詳しくは、石田（2004b））に続き、2003年度COE事業推進協力者として、8月18日より9月7日までの約3週間、インドネシア、ジョクジャカルタ・サブセンターを拠点に在外研究を行った（2003年度第1回出張）。さらに、アカデミック・フォーラムと特別イベントのために、2004年1月25日から31日までインドネシアを再訪した（同第2回出張）。以下に、2003年度の在外研究の概要、および2004年度中の国内での継続研究の概要を、本論中の対応する節の順に報告する。

第1回在外研究（2003年8月18日～9月7日）の期間は、主にインドネシア国立芸術大学（以下、ISI）記録メディア学部テレビ学科との共同研究プロジェクトの企画立案に従事した。

具体的には、現地協力者を得て、自身でのジョクジャカルタのテレビ視聴経験を題材に、予備的調査を兼ねたドキュメンタリー制作のための撮影作業・素材収集を行った（詳細は、第Ⅱ節）。滞在期間中に開催された独立記念日関連行事の取材、ガジャマダ大学（以下、UGM）訪問、多数の一般家庭訪問、インタビューの収録等を行った。また、ISIの卒業式（9月6日）にも参列し、資料作成のためのビデオ撮影を行うと同時に交流を深めた。

並行して、ISIの学生を中心にジョクジャカルタのイメージを題材としたビデオ・ドキュメンタリーを制作してもらい、ジョクジャカルタ及び大阪、その他の地域での共同上映会を開くという企画を立てた。バンデム学長およびスジョノ教授に面談し、2004年1月に予定された共同上映会までのタイム・スケジュールについて打ち合わせを行い、上映会までにISI側制作のビデオ・ドキュメンタリー作品を完成させてもらう段取りとなった（第Ⅲ節）。

第2回出張（2004年1月25日～31日）では、UGM文化科学部とISIの両校と、大阪市立大学都市文化研究センター（OCU、UCRC）の共催、第2回アカデミック・フォーラムに出席するために、ジョクジャカルタを再訪した。このフォーラムにおいて、石田佐恵子は、ビデオ・プ

*大阪市立大学大学院文学研究科助教授・COE事業推進協力者

レゼンテーション「カフェ放送てれれにおける『多文化』イメージ」（Ishita（2004a））を行った。また、ISIテレビ学科との共催特別イベントの活動（「イマジナリー・ランドスケープ・ジョクジャカルタ」特別ビデオ上映会）を行った（第Ⅳ節）。

さらに、2004年度中には、ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクト継続研究として、ISI制作作品6本に日本語字幕を付けた日本語版DVD（FSMR-ISI＋石田（2004d））を完成させ、それを用いて、日本国内での上映会や授業での使用を企画、各地の協力者を得て実施し、それらのドキュメンタリーに対する感想文の収集などを行ってきた（第Ⅴ節）。

最後に、一連の研究活動において収集された基礎的資料のとりまとめを行い、今後の課題として、それらの資料を用いた分析・さらなる映像の比較社会学の展開について述べる（第Ⅵ節）。

Ⅱ．ジョクジャカルタを拠点とした「映像の比較社会学」の構想

Ⅱ―1. 問いと主題の設定

石田（2004b）では、「映像の比較社会学」のアイディアは次のように構想されている。すなわち、「『映像』というひとつの記録メディアの形式に着目した比較社会学」である。そこで既に述べたことだが、「インドネシアの」映像と「日本の」映像を無前提に比較することなど、そもそも不可能である。ある国民国家内に「同一性のある文化」や「同一の意味世界」があらかじめ存在する、と前提することはできないからである。そこで、「比較」という用語の困難を回避するための装置・回路として、岡村圭子らの議論を参考にしながら、「文化的差異のフォーマット化（再・共同化、あるいは、再・差異化）」という概念を導入した。私たちが国境を越えて、何らかの意味を生成するテクストに出会うとき、それらは「異文化」として初めから存在しているわけではない。それらは、誰かの視点によって、何らかの形で「われわれ（の文化）」と「彼ら（の文化）」を同一化し、差異化する、距離を計測する営みから生成される。それこそが「フォーマット化」であり、文化的差異（＝〈異文化〉）を再・差異化するものである。本プロジェクトでは、この文化単位のフォーマット化の営みそのものとして、「映像」をとらえている。すなわち、テレビ番組や映画、ドキュメンタリー作家や文化人類学者が制作する作品まで含めて、映像というテクストは、〈異文化〉を異文化として、あるいは、グローバルな番組コンテンツとして、それぞれの文化の境界を再定義し、絶え間なく再・同一化と再・差異化を行っている現場であるととらえられるからである。

そして、このような「映像の比較社会学」の展開可能性として、次の2つの方向を考えた。

第一に、巨大資本による地上波テレビ、衛星放送テレビなど、メインストリームのテレビジョン文化研究。石田（2004b）の資料は、この第一の方向で作成されたものである。

第二の方向性は、映像の制作・流通・意味解釈にかかわるものである。それはまた、「映像」を「文化単位のフォーマット化」という概念からとらえ直す際に、「誰がそれをフォーマット化しているのか」という問いに直結している。「誰が」というこの問いをさらに細分化して述べると、ひとつの水準としては、制作サイドの組織形態がある。テレビ局やスポンサーといった巨大資本によって作られるメインストリームのテレビ番組として作られるのか、映画会社・映画

配給という形など既成の映像流通回路を経たものなのか、インデペンデントな制作者によって自主流通作品として作られた映像なのか、といったレベルである。他方、文化的な差異を語る〈語り手〉としての映像、という観点から考えると、映像制作者がある文化に精通する〈ネイティブ〉なのか、あるいは〈外部者〉の視線を前提とするものなのか、視線の権力関係、支配・同化・順応などいかなる視点からフォーマット化を行っているのか、という問題群へと展開していく。

2003年度のインドネシア、ジョクジャカルタにおける在外研究のねらいは、「誰が（映像を介して）文化単位をフォーマット化するのか」という問いに焦点を当てるものである。前年度の焦点が、メインストリーム・メディアのテクスト分析に置かれていたため、それと対比して考えるために、特に、メインストリーム・メディアではない、個人レベルの映像制作に着目した。

まず手始めに、アマチュアの映像制作者の立場に自ら身を置いて、ジョクジャカルタを拠点に映像制作を試みてみることにした。このような手法を採る理由は、映像制作の実践を自ら経験してみることが、制作者の実践知の水準について考える重要な手がかりとなると思われたからである。また、映像（ビデオカメラ）を用いた社会調査、フォールドワークの可能性についても併せて考えてみたかった。このような手法の先行研究としては、山中（1993）などがある。最後に、これが最大の理由かもしれないが、オーソドックスなインタビュー調査やフィールドワークを行うには、私自身の言語能力や理解能力に無理があるため、文化的に無知な〈外部者〉として人びとに了解可能な存在であるために、ビデオカメラを介在させた方が良い結果が得られるのではないかと判断もあった。

ドキュメンタリー映像作品の主題としては、「テレビはどのように見られているのか」という問いを選んだ。この問いは、前年度のジョクジャカルタ滞在において、この5年間の急速なテレビの変化（民営化、規制緩和、多チャンネル化、村部への普及）があったことが理解されたので、特に、1998年以降のテレビをめぐる状況変化について考えてみたかったからである。従来、特定の地域を対象とした文化人類学における研究テーマは、開発や産業化の進んでいない地域や農村の暮らし、伝統的な生活様式・儀礼を中心とするものであったが、近年の対象諸地域の急速な発展・電化やメディアの普及により、人びとの暮らしは大きく変化しつつあり、そのような状況下において、メディア人類学的観点からの研究が注目されてきている。映像制作に当たっては、こうした新しい主題群を念頭に置きながら、人びとの暮らしの中でテレビがどのように見られ、どのような意味を持っているのか、それぞれの対象者が生活する空間を舞台に映像化してみようと考えた。それは、長期に渡るフィールドワークにはとうてい及ばないものの、言語的な理解だけではなく、映像データから得られる資料の意味を同時に考えることでもあった。この映像制作を開始する段階で目にしていた文献は、前年の在外研究で交流したパム・ニラン博士の論文（Nilan（2003））や、Askew&Wilk（2002）がある。この在外研究期間終了後に日本で発行された関連書・文献としては、小林・毛利（編）（2003）、原（2004）、飯田（2004）などがある。

Ⅱ―2. 映像制作を通した調査（撮影取材）の概略

「テレビはどのように見られているのか」を主題にしたドキュメンタリー映像制作のための取材は、2003年8月20日から9月1日まで、継続的に続けられた。撮影機材は、UCRCジョクジャカルタ・サブセンターで購入したデジタルビデオカメラと三脚の他、石田の私物を用いた。撮影は石田が中心になって行ったが、撮影補助スタッフ、通訳、対象者選択、バイク運転手、交通手配など、すべての業務を兼ねた現地コーディネーターとして、ジョクジャカルタ在住6年の笠原里愛と、ドゥイ・エカ・ウィヤンディを雇用した。

撮影を伴う取材は、こちらの趣旨を対象者に事前に説明し、テレビ視聴を中心に家庭生活が営まれる居室を含めインタビュー風景を撮影させてもらいたい旨申し入れ、了解を得てから行った。撮影対象者の全数は、10家族、延べ39名である。

撮影対象者の半数5件は、コーディネーターの笠原が居住する村落内の住民であり、それぞれ彼女らと以前からのつきあいがあり個人的な関係を持っていた。また、この取材・撮影に際しては、同村の村長宅に挨拶に伺い、快く許可を得た。取材期間中に同村で行われた独立記念日パレードについてもビデオ撮影を行ったが、村長からはそのパレードを記録したビデオテープを提供して欲しい旨依頼があり、謝礼を兼ねてダビングテープを提供することにした。同村内での取材対象者は、年齢や性別に多様性が得られるように配慮して選択した。

同村以外の対象者については、さまざまな経路・きっかけから依頼し、撮影に協力してもらった。これらの撮影では、ジョクジャカルタ近郊地域に住む人びとが対象とはなったが、階層・学歴・性別・世代などの観点から見ると、ジョクジャカルタ近郊住民の代表性を保証するデータではないことは改めて断っておきたい。

こうした撮影実践から、主題や話題に合致してさえいればある意味で対象者は誰でもよく、協力してくれる対象者を選り好みすることなく当たっていくだけで取材が短期間にできてしまうことが実感できた。そして、撮影された映像は、編集技術や完成される作品の時間枠によって、ある程度バラエティに富んだ取材を行ったように構築することも可能であることが理解できた。

【資料1】（データ数　全10件、100‐107頁に所収）は、撮影対象者の詳細である。文字化作業は、撮影されたビデオテープからテープ起こしする形式で作成された。作業は取材・撮影期間中に並行して進められ、笠原がインドネシア語から逐語的に口述で日本語に訳していき、それらを石田がデータ化した。また、後日、冨岡三智（大阪市立大学文学研究科）が、インドネシア語を訳しつつ、全体的なデータチェックを行い、必要に応じて修正し、注釈を付けた。

各データは、撮影に協力してくれた世帯ごとに1つずつまとめ、取材日の早い順にaからjまでの記号をふって区別した。対象者の氏名は、すべて匿名にし、データ記号に対応するアルファベット（Aさん～Jさん）をふった。複数の成員がインタビューに応じてくれたケースでは、記述の中心となる人物にアルファベット記号をあて、その人物から見た家族関係（夫・妻、父・母・長男・長女など）から記述した。対象者の年齢や出身地などのフェイスシートは質問項目とは別にデータ化した。地名についても、ジョクジャカルタ特別州以下の詳細については、アルファベットに置き換えて記述した。

この撮影取材において、対象となった家族の概略は以下の通りである。

【表Ⅱ―2―1】　撮影対象者の属性・テレビ購入時期

データ	家族形態	居住地域	テレビの購入時期	備考
a	30 代核家族	村部	1980 年代半ば	
b	30 代核家族	近郊	1995 年	
c	20 代独身男性	村部	2001 年	
d	3 世代同居拡大家族	市内	1977 年	
e	30 代核家族	村部	1980 年頃	
f	10 代女子中学生	村部	不明	撮影中心
g	20 代独身男性グループ	村部	非該当	グループ・インタビュー
h	60 大夫婦(拡大家族)	近郊	1978 年頃	
i	30 代核家族	近郊	1998 年	
j	2 世代同居拡大家族	近郊	1975 年	

撮影取材を通して多くの発見があったが、とりわけ、人びとがきわめて熱心にテレビを見ていること、急速に普及したテレビ受信機の価値が高いこと、老若男女を問わず日常生活の娯楽の大きな部分を占めつつあること、特に若年層にはその傾向が顕著であることが観察された。また、石田（2004b）での発見にも合致することだが、グローバルに展開するテレビ番組（具体的には国外から輸入された番組）を人びとはきわめて自然に受け入れていて、価値観、宗教、地域性、社会の発展の度合いなどの差異にもかかわらず、それぞれの個人は自身の文脈からこれらの番組を楽しんでいる、ということも発見された。

こうした発見をふまえて、10分程度の映像作品として編集し、発表するためのシナリオ制作（全9頁、都合によりここでは割愛）を行った。題名は、英語・インドネシア語字幕を付けることを前提に「How people watch TV in Jogyakarta?（ジョクジャではテレビはどう見られているのか)」とした。シナリオ制作は石田佐恵子が行ったが、ジョクジャカルタ・サブセンターには利用可能な映像編集機器がないため、在外研究期間中に編集作業を行うことはできなかった。仮完成したシナリオを基に、研究補助者の笠原里愛らと議論を行ったが、このシナリオは、典型的な「日本の視聴者を前提とした」テレビ番組のようなもので、現地では関心の焦点が異なっていると推測される、などの点が指摘された。それは、あらかじめ想定されていた、〈外部者〉の視線、文化単位のフォーマット化に関連する論点である。半年後に予定されている共同上映会（詳細は第Ⅲ節）に向けては、より実り多い交流の企画とするためにも、別の企画を加えることが必要であると考えた。それを受けて、都市〈大阪〉と〈ジョクジャカルタ〉の出会いとなり、ビデオ作品を介在した交流が実現するように、大阪在住の映像制作者が作った作品を持参する企画を考え、ISIとの共同企画を若干軌道修正することにした。

なお、この期間中に撮影された映像データは、シナリオに沿った映像作品としても完成を目指すと同時に、映像を利用した調査報告書の資料として活用することを考えている。いずれにしても、それらは、2005年度中の継続課題として持ち越すことになった。

Ⅲ. ジョクジャカルタ・ビデオプロジェクトの企画

Ⅲ―1. 企画の意図

Ⅱ―1. で述べたように、「映像」を「文化単位のフォーマット化」という概念からとらえ直す際に、「誰が映像言語をフォーマット化するのか」という問いが浮上する。映像制作者たちが誰なのか、ある文化の〈ネイティブ〉として自ら語る映像を制作しているのか、〈外部者〉が制作しているのか、それとも〈外部者〉の視点を内面化して制作しているのか、といった問いに答えるためには、複雑な映像言語の解析を必要とする。制作者の主体・視点は、単に制作者自身の属性（国籍や出身地、使用言語）から規定されるものではなく、どのような動機・資本関係・技術において、どのような視線から、映像制作とそのフォーマット化を行っているのか、という点を詳細に検証する必要がある。

近年の映像人類学的試みでは、ある文化的脈絡から見た〈ネイティブ〉な映像制作者とその視点が盛んに奨励される傾向がある。ここでは、ISI制作の映像作品がただちに〈ネイティブ〉な制作者による作品と前提することは出来ない。それらは、UCRCとの共同プロジェクトという意味で、動機や目的においてそもそも国際交流、〈外部者〉からの視線を強く指向したものであることは否めない。しかしながら、私自身が制作を試みた映像作品や日本国内で一般的に視聴可能なテレビ番組におけるインドネシア・イメージなど（たとえば、ミルザンティ（2004）を参照）と比較するなら、十分に〈ネイティブネス〉を有していると想定することはできる。いずれにしても、制作されたドキュメンタリー作品を基礎的資料として、さらなる考察を続けていくことを前提に、共同上映会に向けての実施作業へと移った。

Ⅲ―2. 企画作業の実態

ISIジョクジャカルタ校は、1984年に創立されたインドネシア有数の芸術に関する教育機関であり、その前身は1950年創立のジョクジャカルタ芸術教育アカデミーである。同校は、視覚芸術学部（美術・工芸・デザイン）、パフォーミング・アーツ学部（舞踊・伝統音楽・影絵・劇場など）、記録メディア学部（写真・テレビ）の3学部を擁する。

石田は、前年度末（2003年3月29日）に行われた、UGM・ISI・大阪市立大学都市文化研究センター（UCRC）共催、第1回アカデミック・フォーラムにおいて、ISI記録メディア学部スジョノ教授とペアを組んでセッションを行った。その際、スジョノ教授とISIテレビ学科とUCRCとの共同プロジェクトの可能性を話し合った。上記のように、ISIは制作中心の教育・研究期間であり、基礎研究中心の大阪市立大学文学研究科とは教育体制の面でさまざまな違いがある。そのため、当初はISIサイドのみで映像作品の実作を行うことにし、それに石田が企画者としてかかわる、という案を考えていた。

石田のジョクジャカルタ滞在期間中に、同サブセンターにおいて数回スジョノ教授と共同上映会についての打ち合わせを行った。その際合意されたのは、2003年度中に企画されるドキュメンタリー作品は、ジョクジャカルタを撮影地として、2つの主題を設定して行うという点である。すなわち、(a) Media and every day life in Yogyakarta（「ジョクジャカルタにおけるメディアと日常生活」）、(b) Street Cultures in Yogyakarta（「ジョクジャカルタのストリート・

カルチャー」)。(a)については、Ⅱ―2. で述べた石田自身が制作する映像作品との関連で企画された。 (b)については、中川眞教授（大阪市立大学文学研究科）が同様にISIと共同で「イマジナリー・ランドスケープ・ジョクジャカルタ」（サウンド・スケープと写真の合同展覧会）を企画していたので、その主題に沿うように相談の上発案された。

【図Ⅲ―2―1】は、Ⅱ―2. で述べた、石田によるドキュメンタリー映像作品制作のためのプランである。日本語で書かれた企画書をISIの学部学生にも理解が容易なように、インドネシア語に翻訳した（【図Ⅲ―2―2】)。

さらに、主題(b)においても、実際に撮影することを考えていたわけではなかったが、見本として同様の形式の作品プランを示した（【図Ⅲ―2―3】)。この「8月のある日」という企画は、ISI側で練り直され、『日曜日の王宮広場』という作品として実現した。すべての企画書は、日本語と英語で書かれ、必要に応じてインドネシア語版も制作した。これらの企画書を参考に、ISI側では、授業などの教育実践と適宜織り交ぜながら、独自に制作作業を進め、2004年1月の上映会を目指して作品を完成させることになった。

一方、石田は、在外研究期間を終え大阪に戻った2003年秋に、都市〈大阪〉を紹介でき、ジョクジャカルタで上映可能な映像作品を探す作業に入った。かねてより、自主映像制作の面から交流のあったビデオ工房AKAMEの下之坊修子さんに相談したところ、「カフェ放送てれれ」から提供を受けられる感触を得た。

「カフェ放送てれれ」とは、市民や学生らが制作した短編ビデオを、文字通り「カフェで見せる」、大阪に拠点を置いた非営利活動である。「てれれ」は南米パラグアイの言葉で「お茶の時間」の意味で、下之坊修子ら、ビデオ工房AKAMEのメンバーや、関西在住の映像制作者が中心となって、自主制作ビデオ作品を集め、2003年1月から活動を開始した。大阪や阪神間のいくつかのカフェ（飲食店）を拠点に、それぞれの場所で1ヶ月に1度ずつ、60分ほどのビデオ作品上映会を行っている。1度に上映される作品数は10本程度で、作品の長さは10分以内というように定められている。視聴は無料だが、上映会場は喫茶店やレストランであるため、何かを注文し、飲食しながら視聴する仕組みとなっている。

2003年の冬までに「カフェ放送てれれ」で上映された作品は、100ほどになっていた。石田は、ビデオ工房AKAMEの協力を得て、すべての作品を視聴し、（大阪の）都市文化を紹介しうる作品、特に「メディアと日常生活」「ストリート・カルチャー」という2つの主題に合致する18の作品を選び、『てれれセレクト・ジョクジャカルタ』版として、特別編集させてもらった。また、それぞれの制作者に連絡を取り、ジョクジャカルタにおける作品上映許可を得た。ビデオ工房AKAME、および下之坊修子さんの全面的な協力がなければ、この共同上映会はありえなかった。テープの編集実費を除くほぼすべてを無償で快く提供してくれた関係者の方々に改めて感謝の意を記しておきたい。

Entry sheet

The Subjects in 2003: put ✓

✓ (a) Media and every day life in Yogyakarta

(b) Street Cultures in Yogyakarta

Title of documentary
How people watch TV
Entry team Director Saeko Ishita (OCU) Interviewer Rie K. (Ex-ISI Student) Technician Dwi eka wiyandi (Studio-gandos)
Brief description about the theme インドネシアでは、１９８０年代に国営放送に加えて民間放送が開始され、家庭におけるテレビ普及率も次第に大きくなっていった。特に、近年５年間のチャンネル数の増加や番組の多様化は、非常に著しい。テレビは人々にとってきわめて魅力的なメディアであり、同時に、テレビを見るということは日常的な経験である。テレビが家にやってきたことで、人々の日常生活、家族関係、近所つきあいはどのように変わったのか。 この作品では、ジョグジャカルタ近郊に住むさまざまな個人に、どのようにテレビを見ているのか、率直に語ってもらう。人々は、テレビといつごろ、どのようにして出会ったのか、その記憶を記録する。テレビの変化によって、生活はどのように変わったのか。世代や職業によってテレビの見方は違うのだろうか。全体として、テレビが日常生活の中でどのような意味を持つメディアなのかを描く。映像人類学や口述史（オーラル・ヒストリー）の方法を用いたドキュメンタリーを作りたい。 ナレーション：日本語（インドネシア語字幕付き） インタビュー：インドネシア語、ジャワ語（日本語字幕付き）
Entry Date　２００３年８月２５日

【図Ⅲ―2―1】　作品プラン見本1（日本語）

Entry sheet

The Subjects in 2003: put ✓

✓ (a) Media and every day life in Yogyakarta

(b) Street Cultures in Yogyakarta

Title of documentary
How people watch TV
Entry team Director: Saeko Ishita (OCU) Interviewer: Rie K (Ex-ISI Student) Total Support: Dwi eka wiyandi (Studio-gandos)
Brief description about the theme Di Indonesia, tahun 1980, TVRI menjadi andalan media gambar yang sangat dominan, baru diawal '90-an tumbuh berkembangnya televisi swasta untuk menjumpai para pemirsa di rumah. Penyebaran televisi swasta beserta program acaranya semakin besar, khususnya tahun-tahun belakangan ini dalam kurun 5 tahun belakangan ini dengan acara-acara yang menarik para pemirsa media televisi di Indonesia setelah media cetak. Juga kapan beli TV, kapan ada waktu buat nonton, dan bagaimana pula hubungan keluarga, hubungan tetangga,setelah ada perubahan dunia pertelevisian. Di karya ini kita ingin mendapat jawaban, mencari jawaban sehari-hari yang khususnya pemirsa yang tinggal di sekitar kota Yogyakarta, bagaimana / kapan ketemu dengan televisi. Jadi kali ini catat kehidupan para pemirsa melalui perbandingan nonton televisi dengan yang tidak, juga kita bandingkan generasi sekarang dan masalalu. Pada umumnya kita tangkap televisi itu di dalam kehidupan sehari-hari apa adanya, kita ingin mengabadikan kehidupan sehari-hari dengan acara televisi melalui dokumentasi dengan cara Visual-Anthropology dan Oral history.
Entry Date 25 August 2003

【図Ⅲ—2—2】 作品プラン見本1（インドネシア語）

Entry sheet

The Subjects in 2003: put ✓

(a) Media and every day life in Yogyakarta

✓ (b) Street Cultures in Yogyakarta

Title of documentary
A DAY in August
Entry team Producer Saeko Ishita (OCU) Stuff OCU Students (Combination work)
Brief description about the theme ジョグジャカルタは路地の美しい街である。王宮の周辺には入り組んだ細い路地が魅力的に広がっている。大通りの喧噪からは離れて、住宅地の中にゆっくりと物売りの自転車が行き来する。 撮影スタッフは、８月の早朝に出発する。早朝の路地には、パンを売り歩く物売りや仕事に出かける住人が行き交い、活気がある。自転車に乗ったパン屋はどこから来て、どこへ行くのだろうか。共通のラッパ音はいつごろから使われているのだろう。昼下がりの路地は眠たげである。強い日差しが濃淡のはっきりした影を落とす路地のそこここに、小さな子ども達と彼らを見守る母や祖父母の姿が見える。ベチャのおじさんたちは木陰でまどろむ。軽快な音楽でささやきかけるように、アイスクリーム屋が通り過ぎていく。夕方の物売りが急いで店じまいを急ぐ頃には、路地はすっかり暗くなっていく・・・。 撮影は８月のある１日だけで行う。各班の競作とする。路地の音や印象的な映像、音楽を用いた作品にしあげたい。各班はカメラ・インタビュー・機材の２～３名構成。 ナレーション：日本語（インドネシア語字幕付き） インタビュー：インドネシア語、ジャワ語（日本語字幕付き）
Entry Date　２００３年８月２６日

【図Ⅲ―2―3】　作品プラン見本2（日本語）

Ⅳ. ビデオ上映会（ジョクジャカルタ）の実施

Ⅳ―1. 実施の概要

2004年1月29日に、UGM・ISI・UCRCの共催による第2回アカデミック・フォーラムが、ジョクジャカルタにて行われた。このフォーラムと同時開催の形式で、1月28日から2月1日まで、モダン・スクール・オブ・デザイン（MSD）の一室を会場に、「イマジナリー・ランドスケープ・ジョクジャカルタ」（サウンド・スケープと写真の共同展覧会、中川眞教授、スジョノ教授（ISI　記録メディア学部テレビ学科長）、リスマン・マラー先生（MSD教員、写真家）による共同開催）が行われた。

石田佐恵子は、上記アカデミック・フォーラムにて、ビデオ・プレゼンテーション「カフェ放送てれれにおける『多文化』イメージ」（Ishita（2004a））を行った。また、「イマジナリー・ランドスケープ・ジョクジャカルタ」の特別イベントとして、1月28・29日の両日、スジョノ教授と共同でビデオ上映会「ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクト」を行った。特に、28日は「イマジナリー・ランドスケープ・ジョクジャカルタ」のオープニング・セレモニーの直後に上映を行ったので、70～80名の参加者があった。その多くは、ISIおよびMSDの学生だったようである（**【図Ⅳ―1―1】**）。

【図Ⅳ―1―1】　当日のビデオ上映会の様子（石田佐恵子撮影）

【図Ⅳ―1―2】は、当日参加者に配布されたイベントのパンフレットの抜粋である。このパンフレットは、中川眞教授と石田佐恵子が協力し、スジョノ教授とリスマン先生が制作したものである。本文は、英語とインドネシア語で書かれており、「カフェ放送てれれ」の紹介記事、「てれれ」の作品解説（どちらも英語）については、石田が執筆した。

Imaginary
Landscape Yogyakarta

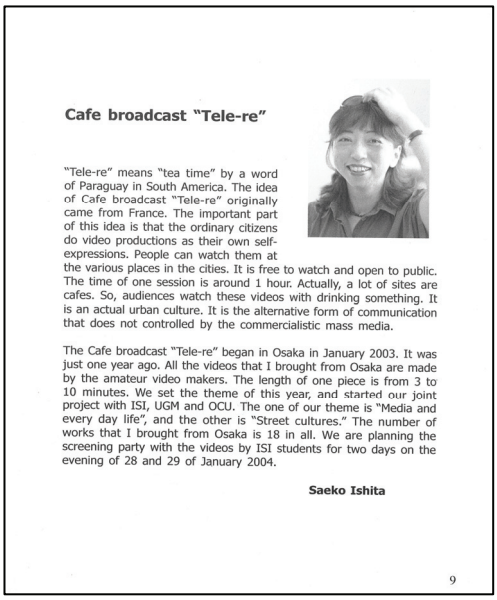
Instalasi Suara
Shin Nakagawa

Pameran Foto
Risman Marah
& Soeprapto Soedjono

Penayangan Video
OCU & FSMR ISI Yogyakarta

KAMPUS MSD TAMANSISWA YOGYAKARTA
28 JANUARI- 1 FEBRUARI 2004

当日配布されたパンフレット（表紙）



Cafe broadcast "Tele-re"

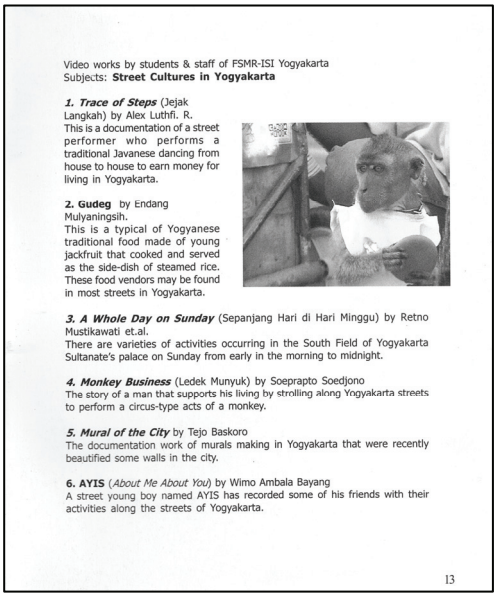
"Tele-re" means "tea time" by a word of Paraguay in South America. The idea of Cafe broadcast "Tele-re" originally came from France. The important part of this idea is that the ordinary citizens do video productions as their own self-expressions. People can watch them at the various places in the cities. It is free to watch and open to public. The time of one session is around 1 hour. Actually, a lot of sites are cafes. So, audiences watch these videos with drinking something. It is an actual urban culture. It is the alternative form of communication that does not controlled by the commercialistic mass media.

The Cafe broadcast "Tele-re" began in Osaka in January 2003. It was just one year ago. All the videos that I brought from Osaka are made by the amateur video makers. The length of one piece is from 3 to 10 minutes. We set the theme of this year, and started our joint project with ISI, UGM and OCU. The one of our theme is "Media and every day life", and the other is "Street cultures." The number of works that I brought from Osaka is 18 in all. We are planning the screening party with the videos by ISI students for two days on the evening of 28 and 29 of January 2004.

Saeko Ishita

9

「てれれ」の紹介文のページ



Video works by students & staff of FSMR-ISI Yogyakarta
Subjects: **Street Cultures in Yogyakarta**

1. Trace of Steps (Jejak Langkah) by Alex Luthfi. R.
This is a documentation of a street performer who performs a traditional Javanese dancing from house to house to earn money for living in Yogyakarta.

2. Gudeg by Endang Mulyaningsih.
This is a typical of Yogyanese traditional food made of young jackfruit that cooked and served as the side-dish of steamed rice. These food vendors may be found in most streets in Yogyakarta.

3. A Whole Day on Sunday (Sepanjang Hari di Hari Minggu) by Retno Mustikawati et.al.
There are varieties of activities occurring in the South Field of Yogyakarta Sultanate's palace on Sunday from early in the morning to midnight.

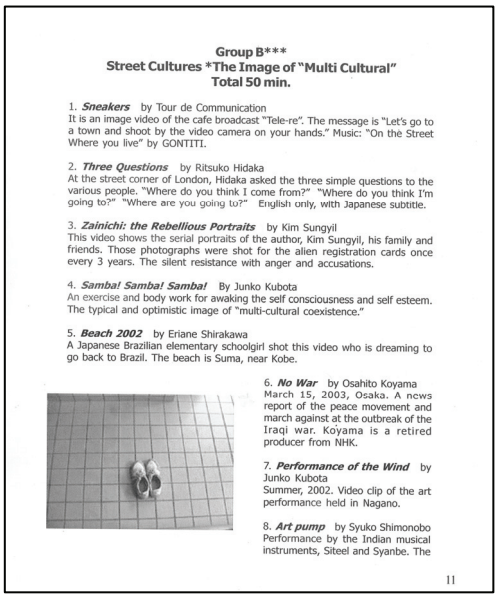
4. Monkey Business (Ledek Munyuk) by Soeprapto Soedjono
The story of a man that supports his living by strolling along Yogyakarta streets to perform a circus-type acts of a monkey.

5. Mural of the City by Tejo Baskoro
The documentation work of murals making in Yogyakarta that were recently beautified some walls in the city.

6. AYIS (*About Me About You*) by Wimo Ambala Bayang
A street young boy named AYIS has recorded some of his friends with their activities along the streets of Yogyakarta.

13

当ジョグジャカルタ側の作品解説



Group B***
Street Cultures *The Image of "Multi Cultural"
Total 50 min.

1. ***Sneakers*** by Tour de Communication
It is an image video of the cafe broadcast "Tele-re". The message is "Let's go to a town and shoot by the video camera on your hands." Music: "On the Street Where you live" by GONTITI.

2. ***Three Questions*** by Ritsuko Hidaka
At the street corner of London, Hidaka asked the three simple questions to the various people. "Where do you think I come from?" "Where do you think I'm going to?" "Where are you going to?" English only, with Japanese subtitle.

3. ***Zainichi: the Rebellious Portraits*** by Kim Sungyil
This video shows the serial portraits of the author, Kim Sungyil, his family and friends. Those photographs were shot for the alien registration cards once every 3 years. The silent resistance with anger and accusations.

4. ***Samba! Samba! Samba!*** By Junko Kubota
An exercise and body work for awaking the self consciousness and self esteem. The typical and optimistic image of "multi-cultural coexistence."

5. ***Beach 2002*** by Eriane Shirakawa
A Japanese Brazilian elementary schoolgirl shot this video who is dreaming to go back to Brazil. The beach is Suma, near Kobe.

6. ***No War*** by Osahito Koyama
March 15, 2003, Osaka. A news report of the peace movement and march against at the outbreak of the Iraqi war. Koyama is a retired producer from NHK.

7. ***Performance of the Wind*** by Junko Kubota
Summer, 2002. Video clip of the art performance held in Nagano.

8. ***Art pump*** by Syuko Shimonobo
Performance by the Indian musical instruments, Siteel and Syanbe. The

11

「てれれ」作品を紹介するページ

【図Ⅳ―1―2】　当日配布されたパンフレット（抜粋）

Ⅳ―2. 上映された作品について

両日の上映スケジュールは、**【表Ⅳ―2―1】**の通りである。

【表Ⅳ―2―1】　上映スケジュール（原文は英語）

日時	グループ	制作	備考
1 月 28 日（水） 5:00-6:00	Group A: Media & Everyday Life	カフェ放送 てれれ	学生スタッフ、 関係者の試写
7:00-8:30	オープニング・セレモニー		
8:30-9:30	Street Cultures in Yogyakarta	FSMR-ISI	主催者挨拶、 「てれれ」の作品も 一部上映した。
1 月 29 日（木） 9:30-10:30	Group B: Street Cultures in Osaka	カフェ放送 てれれ	
2:00-3:00	Group B: Street Cultures in Osaka	カフェ放送 てれれ	
5:00-5:30	Street Cultures in Yogyakarta	FSMR-ISI	大雨のため中止
7:00-8:00	Group A: Media & Everyday Life	カフェ放送 てれれ	大雨のため中止

当日上映された作品は、ISI側が6作、『てれれセレクト・ジョクジャカルタ』は、グループA「大阪のストリート・カルチャー」が8作（50分）、グループB「メディアと日常生活」は10作（50分）である。

具体的には、ISI側が、①Trace of Steps、②Gudeg、③A Whole Day on Sunday、④Monkey Business、⑤Mural of the City、⑥AYIS (About Me About You)である。そのうち、②と④には英語字幕が付けられていたため、インドネシア語が理解できなくとも視聴は容易であった。他の作品についてもパンフレットに英語の概略が添えられていた。上映会後、スジョノ教授から快くすべての作品をVCDの形式でいただいたので、大阪での上映会を企画することを約束した。

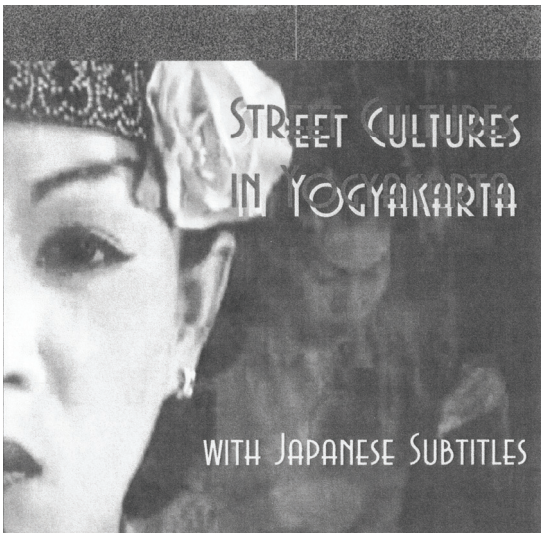
『てれれセレクト・ジョクジャカルタ』は、グループAが、①Shadow（みやばら美か）、②flower letter（桑山佳代子）、③自販機のみる夢は…（新堂順一）、④都会の迷彩色（関西大学学生）、⑤HAPPY（平松順子）、⑥回帰祭（江川昌宏）、⑦冬の波音（樋口耕一）、⑧The Dream of Reed（Oz）の8作。グループBは、①スニーカーバンドへの道（ツールド・コミュニケーション）、②3つの質問（日高理都子）、③在日－反乱する肖像（金成日）、④サンバ　サンバ　サンバ（久保田順子）、⑤2002年　海（白川エリアネ）、⑥No War（小山帥人）、⑦風人（久保田順子）、⑧アートポンプ　in　えべ白馬（下之坊修子）、⑨Women in Black（小山帥人）、⑩記録と記憶のトライアングル（エンドウノリコ）の10作である。いずれの作品も、タイトルと概略の英語訳をパンフレットに掲載した。

既に記したように、1日目（28日）は多数の観客を得て、非常に好評を博した。『てれれセレクト・ジョクジャカルタ』についても、字幕なしでの上映だったので、細部の理解が難しい作品も含まれていたが、概ね好評だった。全体的に、観客のビデオ作品に対する関心が高く、非常に熱心に作品を視聴する姿がたいへん印象的だった。2日目（29日）は、私自身がアカデミッ

ク・フォーラムに出席しなければならなかったため、昼の時間帯の上映会に参加することができず、残念であった。技術スタッフの学生に聞いたところ、MSDの校長先生なども来られていたとのことであった。また、夕方以降は雨期特有のバケツをひっくり返したような大雨となり、5時以降の観客が期待できず、早々に帰宅することになったことも残念だった。しかし、短い時間ながら、ビデオ作品を通した交流活動の可能性について大いに考えることができた上映会だった。

Ⅴ. ビデオ上映会・講義での使用とその感想

Ⅴ―1. 日本語版DVD制作について



＊日本語版DVD
FSMR-ISI、石田佐恵子（監修）
『STREET CULTURE IN YOGYAKARTA』
制作：インドネシア国立芸術大学
配給：大阪市立大学都市文化研究センター
字幕：冨岡三智、石田佐恵子
2004年、68分

【図Ⅴ―1―1】　日本語版DVDの表紙写真

2004年度の継続研究の基礎的資料として、ジョクジャカルタで行われた共同ビデオ上映会の作品6編について、大阪に持ち帰り日本語字幕を付けてVHSテープおよびDVDを作成した。作業は、2004年3～4月に行われた。VCDからのダビングと英語字幕翻訳を石田が、インドネシア語からの日本語字幕作成を冨岡三智（大阪市立大学文学研究科）が行った。映像への字幕編集作業は、「カフェ放送てれれ」での放送を前提にして、「てれれ」に全面的に技術提供を依頼した。

これらの作業を経て、FSMR-ISI、石田佐恵子（監修）『STREET CULTURE IN YOGYAKARTA』（日本語字幕付きDVD『ジョクジャカルタのストリート・カルチャー』）が完成した。**【表Ⅴ―1―1】**の作品解説文は、石田佐恵子によって書かれ、VHSテープおよびDVDに添えられた。また、上映会のための配布規約を併せて記している。

【表Ⅴ―1―1】　ジョグジャカルタ・ビデオ・プロジェクト作品

制作・著作　インドネシア国立芸術大学 記録メディア学科　学生&スタッフ			
1.	Trace of Steps （足跡をたどる）	アレックス・ルスフィ・R	5分
	ジャワの伝統的な旅芸人（ストリート・パフォーマー）、「タンダーン」の一家の記録。家から家へとダンスを見せながら生計を立てている旅芸人ダンサーとその楽団の、音楽と踊りを追った。		
2.	「グデ」甘過ぎっ？！	エンダン・ムルヤニンセ	10分
	「グデ」は、ジャックフルーツの実を甘辛く煮込んだジョクジャカルタの名物料理である。教育都市として知られるジョクジャカルタには、インドネシア各地や世界各国からの学生達が暮らしているが、彼らに「グデ」についてインタビューしてみた。日本人留学生もさりげなく出演。		
3.	日曜日の王宮広場	ルチア　R 他	8分
	古都ジョクジャカルタの王宮は、環状道路に囲まれ、前庭（北庭）と裏庭（南庭）を擁し、市民に開放されている。ある日曜日、早朝から深夜まで、丸一日の王宮広場でのアクティビティを記録した。ジョクジャ市民が王宮広場をこよなく愛し、さまざまな市民生活が営まれている様子がよく分かる。		
4.	モンキー・ビジネス（猿使い）	スプラプト・スジョノ＆ クリストファラスAD （共同製作）	6分
	小さなドラムをたたきながら、猿使いの大道芸人がやって来る。この音を聞きつけて、近所から小さな子ども達が集まってくる。猿使いナハディと彼のパートナー、シャンティの記録。		
5.	ジョクジャカルタの壁画制作	テジョ・バスコロ	20分
	近年ジョクジャカルタのさまざまな街頭で展開されている壁をアートで飾る活動のドキュメンタリー。さまざなアーティストや制作の様子が見られる。		
6.	AYIS（ボクについて／あなたについて）	ウィモ・アンバラ・バヤン	15分
	AYIS（アイス）という名前の13歳の少年が、自分の家族や友人、育った市場を、初めて手にするビデオで撮影した。		

ビデオテープ貸し出し条件（配布規約）

・複製、加工、再配布を禁じます。

・上映会の記録、感想を石田までお知らせください。

・研究上の利用、引用は自由ですが、資料出所を明記のこと。

Ⅴ―2. ビデオ・プロジェクト作品　上映記録

上記のような配布規約を添えて、特にインドネシアのメディアに関係のある研究者、教員などに日本語版作品を無償で配り、大阪や国内の大学などで順次上映・公開してもらった。

【表Ⅴ―2―1】　ジョグジャカルタ・ビデオ・プロジェクト上映記録

番号	日時	場所	名称・協力	備考
①	2004 年 5 月 29 日	大阪市立大学文化交流センター	「ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクト上映会」（COE・B 班研究会）	報告：石田佐恵子、 冨岡三智、 参加者約 25 名
②	6 月 1 日	東京外国語大学	内藤耕先生の協力による	受講生数約 25 名
③	6 月 21 日	東海大学	内藤耕先生の協力による	受講生数約 25 名

④	7 月 5 日	桃山学院大学	小池誠先生の 協力による	受講生数約 180 名
⑤	7 月 19 日	東京大学情報学環 メルプロジェクト	坂田邦子さんの コーディネートによる	参加者約 20 名
⑥	12 月 22 日	大阪市立大学	石田佐恵子担当「現代 文化の社会学」にて	受講生数約 120 名
⑦	2005 年 1 月 17 日	甲南女子大学	石田佐恵子担当「メ ディア論」にて	受講生数約 40 名
⑧	2004 年 5 月 より順次	大阪市内、関西近郊	カフェ放送てれれ／セ ントラル・ケーブル・ ネットワーク	一般市民向け

まずDVD完成記念の手始めに、大阪市立大学文化交流センターにて冨岡三智とともに上映会を行った（**【表Ⅴ―2―1】**①）。上映会終了後、インドネシア人留学生を含め、多くの参加者たちと意見交換を行った。その模様はウェブにて公開している（石田（2004e））。

こうした上映活動を通して気づかれたことは、ごく当たり前のことだが、映像を介した「文化的単位／文化的差異のフォーマット化」について考えることは、映像制作側の営みだけが対象なのではなく、それを視聴し解釈する側の営みもまた対象とされなければならない、という点である。「文化的単位／文化的差異のフォーマット化」あるいは、「再・フォーマット化」には、メディア・テクストの意味生成にかかわる3つの地点（メディア制作者／メディア・テクストそのもの／オーディエンス）のそれぞれから考えていくことが必要なのであり、自主制作・流通の形式で視聴される映像作品は、それらの3地点を実験的に扱うことが可能な、より制御しやすい素材と考えることができる。

以上の点から、継続的にジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクトに関するオーディエンスの反応・解読（感想文）をデータとして収集し、同時にそのデータが収集されたコンテクストをも含めて全体を記録しておくことにした。

なお、章末資料の前に、2004年5月29日のジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクト上映会にて知り合った、桃山学院大学文学部の小池誠教授より、コメントの特別寄稿をいただいた。小池誠教授は、インドネシア語も堪能な東南アジア・南アジアの地域文化研究の専門家であり、特に最近はメディア人類学的関心を傾けて研究されている。上映会当日、上映終了後に積極的な議論を展開していただいただけではなく、ISI制作者に向けてのインドネシア語での手紙（感想とコメント）を寄せていただき、さらにその後、講義時を利用しての感想文データの収集にも快くご協力いただいた。各講義における学生からの感想文データと併せてお読みいただきたい**【特別寄稿】**（98-99頁）。

Ⅴ―3. 収集された感想文データについて

【資料2】（全40頁、108‐147頁に所収）は、ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクト作品に対する学生からの感想文の原データである。データ収集は、2004年度中に実施されたビデオ上映記録（**【表Ⅴ―2―1】**）のうち、①、⑤、⑧を除く全5回（5大学、5講義における教材利用）において行われた。データ収集にご協力いただいた桃山学院大学文学部の小池誠先生と東海大

学文学部の内藤耕先生、そして受講生たちに、ここで改めて記してお礼を述べておきたい。

感想文は授業時に配布された用紙に手書きで書かれたものである。ワープロ入力は、石田佐恵子の科学研究費補助金によって雇用された学生バイトが行い、石田が最終チェックを行った。用紙と設問は講義によって事情が異なるため、担当者が自由に設定した。詳細は**【表Ⅴ―3―1】**の通り。

【表Ⅴ―3―1】

大学名	講義名	担当者	実施日	データ数
東京外国語大学	「アジア地域研究II:インドネシアの現代政治」	内藤耕	2004年 6月1日	受講生数約25名
東海大学	文学部専門科目「東南アジア・ネットワーク社会論」	内藤耕	6月21日	受講生数約25名
桃山学院大学	文学部専門科目「比較文化研究：世界の多様なメディア」	小池誠	7月5日	受講生数約180名 特記事項:6作品のうち「ジョクジャカルタの壁画制作」は早送りにて視聴（事業時間の制約による）。「特に印象に残った作品」について書くように求めた。
大阪市立大学	全学共通科目「現代文化の社会学」	石田佐恵子	12月22日	受講生数約120名 「特に印象に残った作品と、その理由」について書くように求めた。
甲南女子大学	人間科学部専門科目「メディア論」	石田佐恵子	2005年 1月17日	受講生数約40名 特記事項：ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクトから4本、日本の他の作品から3本、計7本を視聴。利用趣旨は、メディア・リテラシー育成のため見慣れない形式の映像を解読する、という導入であり、「特に印象に残った作品と、その理由」について書くように求めた。

今後、さらなる分析・考察に利用できるように、ここでは各学生ごとの意見をほぼそのまま記載しているが、個人が特定できるデータは除外している。誤字・脱字は意味が読み取れるものについては修正したが、作品に対する誤解や勘違いによる錯誤は、それ自体が視聴経験を読み解く際に意味あるものと考え、修正していない。

感想データは、全体への感想と、作品ごとの感想に区別して掲載した。また、担当科目や教員によってビデオ作品に対する導入的意味づけが異なっているため、比較できるように大学ごとに並べた。1人の学生が書いた感想を1データとし、原文にかかわらず改行なしで1段落にまとめて記した。1データが終わるごとに1行空きを挿入している。

各大学の受講生の特徴としては、次のような点があげられる。東京外大、東海大、桃山学院大の受講生は、アジア（特にインドネシア）に特化した科目の受講生であり、相対的に高い関心と密度の高い知識を持っている。桃山学院大学・大阪市大生データには留学生の感想が含まれる。大阪市大の受講生は、医学部を除く8学部の多様な関心を持つ学生であり、その半数は理科系である。甲南女子大学の学生は、メディア全般に対する関心から受講している。

Ⅵ. ウェッブ・アーカイブへの展開と今後の課題

最後の節では、映像の比較社会学の構想の今後のさらなる展開のために、残された課題を整理しておきたい。　まず、「文化的単位／文化的差異のフォーマット化」「再・フォーマット化」について精緻な考察を行うには、メディア・テクストの意味生成にかかわる3つの地点（メディア制作者／メディア・テクストそのもの／オーディエンス）のそれぞれから考えていくことが必要である。このプロジェクトで得られた映像資料は、この図式を考えるための基礎的資料として扱うことが可能である。まず、制作者インタビューを含めた、制作者サイドの意味領域への探求がなされる必要がある。また、映像作品そのものの構造分析、映像言語の構成や特徴を記述する作業が必要である。さらに、プロジェクトで得られた感想文をデータとして、オーディエンスによる「文化的差異のフォーマット化」の構造を分析する必要がある。

さらに対比的に考えていくために、インドネシア（ジョクジャカルタ）／日本（大阪）という2つの地点から考えるだけではなく、韓国やシンガポール、その他の諸地域における自主制作映像の流通と具体的な作品受容についても、比較対象として想定する必要があるだろう。パーソナル・コンピュータによる映像編集作業の簡易化、デジタルビデオカメラの世界的な普及、インターネット上で映像作品の視聴が可能となった地域が広がりつつあること、これらすべては、きわめて広範囲で大規模に起こっている社会変容であり、それらのメディアとローカルな諸文化との相互作用について考えていくことは、グローバル化とそれが諸地域における人びとの生活にもたらす影響を考えていくことに他ならない。

2005・2006年度には、この一連のプロジェクトで得られた基礎資料を用いて、ウェブ・アーカイブを構築し、映像を用いた比較社会学的研究のために公開していきたいと考えている。また、関心を共有する学内外の共同作業を通じて、いっそうのネットワーク構築を目指すことにしたい。そのうえで、最終的に、これらの資料を分析した研究成果を完成させる予定である。

【参考・引用文献】

Askew, K. & R. R. Wilk(eds), 2002, The Anthropology of Media: a Reader, Blackwell.

原知章（2004）「メディア人類学の射程」『文化人類学』第69巻1号

飯田卓（2004）「異文化のパッケージ化—テレビ番組と民族誌の比較を通して」『文化人類学』第69巻1号

小林直毅・毛利嘉孝（編）（2003）『テレビはどう見られてきたのか』せりか書房

真木悠介（1981＝2003）『時間の比較社会学』岩波書店（岩波現代文庫）
ミルザンティ、アデ（2004）「日本のテレビにおけるインドネシアのイメージ」『年報　人間科学』第25号　大阪大学大学院人間科学研究科
Nilan, Pam, 2003, '"Risk", the Textually-Mediated Discourse of Romance and Young Indonesian Women' in *RIMA (Review of Indonesian and Malaysian Affairs)*, June 2003.
岡村圭子（2003）『グローバル社会の異文化論』世界思想社
山中速人（1993）『ビデオで社会学しませんか』有斐閣

石田佐恵子による関連する研究業績・口頭発表（2003-4年度中）

Ishita, Saeko, 2003, '"Sacred Families" in Japanese Tabloid Television' in Urban Culture: Traditional and Contemporary, vol.1 University of Gadjah Mada & Osaka City University, Urban Culture Research Center.

Ishita, Saeko, 2004a, 'The Images of "Multi Cultural" from Cafe Broadcast "Tele-re" ' at International Academic Forum: Symposium on Coexistence in the Multicultural City, University of Gadjah Mada (Yogyakarta).　＊「てれれ」作品を紹介するビデオ・プレゼンテーション　COEシンポジウム（ジョグジャカルタ・サブセンター主催）2004年1月29日

石田佐恵子　2004b　「映像の比較社会学の構想と実践～その①～」『東南アジアにおける文化表象の諸相』(79-129頁)　大阪市立大学都市文化研究センター　2004年3月

石田佐恵子　2004c　「カフェ放送てれれ作品、インドネシアに渡る・顛末記」『市民メディアねっと』第15号　(4頁)　市民メディアねっと編集　2004年4月

FSMR-ISI、石田佐恵子（監修）　2004d　『STREET CULTURE IN YOGYAKARTA』（日本語字幕付きDVD　『ジョクジャカルタのストリート・カルチャー』）大阪市立大学都市文化研究センター（研究利用専用）

石田佐恵子　2004e　「ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクトについて〈上映会と解説〉」第24回COE　B班研究会　於大阪市立大学文化交流センター　2004年5月29日、同研究会報告（web page）http://www.lit.osakacu.ac.jp~ishita/yogya2/video.htm

Ishita, Saeko, 2004f, 'The Global television Culture, or Not? ', at World congress International Institute of Sociology, Chinese Academy of Social Sciences.　＊世界社会学会大会（中国社会科学院、北京）における報告　2004年7月8日

石田佐恵子　2004g　「ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクトについて〈報告と上映〉」メル・プロジェクト（代表：水越伸）上映会於東京大学情報学環　2004年7月19日

Ishita, Saeko, 2004h, 'Relocating Popular Images of Cultural Difference', Asia-Pacific Sociological Association , Seoul National University.　＊アジア太平洋社会学会における報告　2004年9月18日

【特別寄稿】

定型化と実験的試み――ジョクジャカルタ・ビデオ・プロジェクト雑感

小池 誠*
Makoto KOIKE

記録メディア学部の若き学生たちが制作した映像だから、きっと野心的・実験的な作品ばかり続いてけっこう疲れるだろうなと、一種の思い込みをもって6作品を見始めた。ところが、意外と堅実で、見やすい（言い換えれば、どこかで見たような）作品がならんでいる。大学を出たらテレビ局に勤めるのがたぶん学生たちの希望なのだから、実験的試みというよりも、むしろより現実的に、練習課題という感じで制作した作品が多いのだろう。

全体を通して見ると、けっこう面白いアイデアの作品もあると思うが、最初に何かワンパターンだと感じさせたのは、ナレーションのせいであった。「日曜日の王宮広場」がその典型である。昔から続いているTVRI（国営放送）の紀行番組とそっくりな雰囲気がする女性ナレーターの語り口である。ところどころ硬い語彙を交えながら、標準（教科書）的なインドネシア語を用いて、ゆっくり少し気取って話すのが特徴である。じっくり映像を見ると、斬新なショットもあるが、いかんせんナレーションが定型的では、作品全体の印象も平凡なものになってしまう。「ジョクジャカルタの壁画制作」の冒頭で、壁画の歴史を紹介していたが、あの部分など、まさにTVRIの教養番組のにおいが漂ってくる。この作品では、途中からナレーションに頼らず、壁画を描いている若者たちの生の声がどんどん流れてくる。かれらの声から感じられる、いかにも学生の街、ジョクジャカルタというリアリティと比べると、ナレーションはいかにも作り物という感じだ。一方、「『グデ』甘すぎっ？！」が成功しているのは、ナレーション抜きで、グデを語る学生の多様な語り口を前面に出したことが大きいと思う。

ナレーションの平板さと比べて、音楽の使い方には面白いものがあった。「モンキー・ビジネス」は、猿使いの語りで話が進んでいく。その背景にビバルディの『四季』が流れるという奇妙な取り合わせが、印象的だった。

実験的な試みとしては、「アイス」が図抜けている。アイスという少年が自分でカメラを持って市場を回っていくので、ぶれたり暗かったりと、けっして見やすいといえない映像がずっと続く。でも、アイスによる市場で働く人々に対する人物評は、つい笑ってしまう。この少年の評価は、「良い」（baik）か「高慢な」（sombong）という二つの形容詞しか出てこないが、けっこう的をえていると感じさせる。ジャワ語もこの作品では使われていて、ゴミゴミして雑然とした市場の雰囲気がよく伝わってくる作品に仕上がっている。

2005年5月

*桃山学院大学

ISIへのコメント（感想を伝える手紙、インドネシア語）

Komentar tentang karya video

Pada seminar yang diatur Dr. Saeko Ishida saya dapat menikmati karya video yang dibikin mahasiswa-mahasiswa ISI. Karya-karya ini semua kualitasnya cukup tinggi. Bagi saya karya yang paling terkesan adalah “Ayis”. Melalui mata anak yang berusia 13, kita dapat menyaksikan orang-orang yang kerja di pasar dan juga hubungan (human relationship) antara mereka. Walaupun ada gambar-gambar yang memusingkan kepala saya, ide ini cukup unik dan menarik. Saya hargai kemampuan staf yang ciptakan karya ini. Tetapi, pada umumnya ada beberapa saran. Dibandingkan dengan “Ayis”, saya merasa karya-karya lain kurang eksperimental. Menurut pandangan saya, staf-staf muda harus lebih berani dan mencoba ide baru mereka. Ternyata kebanyakan karya video dipengaruhi oleh acara TV yang disiarkan sehari-hari. Misalnya karya tentang alun-alun, reporternya presis gaya TVRI. Dari sisi lain ada kekurangan juga. Karya-karya ini banyak memakai narasi dan wawancara untuk menjelaskan ide mereka. Menurut ukuran saya, karya video lebih berdasarkan dengan daya gambar. Bagi orang Jepang biasa yang kurang mengenal budaya Indonesia, karya-karya ini tidak begitu berkesan karena gambar-gambarnya kurang ekspresif. Misalnya, karya “Gudeg” menggunakan banyak wawancara dengan mahasiswa yang berasal dari berbagai daerah. Kalau ada adegan waktu mereka makan gudeg yang tidak cocok dengan selera mereka, saya harap karya ini menjadi lebih berkesan. Sorry, komentar saya agak negatif. Tetapi seperti saya katakan semula, karya-karya ini cukup bermutu dan saya merasa beruntung karena dapat diberikan kesempatan untuk menonton karya-karya mahasisiwa ISI.

東南アジアにおける文化表象の諸相〔第2集〕
——環境モノグラフ調査資料集（2）——

発行日／ 2005年3月30日
編　集／ 山野 正彦
発　行／ © 大阪市立大学大学院文学研究科
「都市文化研究センター」
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
電話　06-6605-3114
yamano@lit.osaka-cu.ac.jp
http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/
印　刷／ ホウユウ（株）
〒590-0982 堺市海山町1-8-4
電話　072-227-8231　　ファックス 072-224-1466